

# 教育課程部会

## I. 研究の概要

### 1. 研究課題

新しい時代に必要となる資質・能力を育成する  
「社会に開かれた教育課程」はどうあるべきか

## 2. 研究内容

### 【研究内容1】

学校教育の好循環を生み出す  
「カリキュラム・マネジメント」の実現

- ア. 構造的・弾力的な教育課程の編成
- イ. 調査・データに基づいた  
PDCAサイクルによる改善
- ウ. 外部資源の活用、外部機関との連携

### 【研究内容2】

自ら課題を発見し解決する資質や能力を育成する  
「総合的な学習の時間」のあり方

- ア. 探究的な見方・考え方、主体的・対話的な学び
- イ. 発達段階に応じた縦のつながりと各教科等との横のつながり（特色ある教育の推進）

## 3. 研究方法

### (1) 交流計画

前半、新学習指導要領の円滑な実施に向けての理論研修会を全体で行う。後半、グループごとに各自持ち寄った実践レポートの交流を行い、研究課題に対する協議・意見交流を行う。

### (2) 分科会構成

小学校の部会員で7グループ、中学校の部会員で5グループを編成し、レポート交流を行う。グループ編成は、登録している研究内容に限らず、多くの実践を交流し、見識を広げていく。

## II. 実践研究の経過と成果

### 1. 実践研究の経過

#### (1) 部会役員研修会による研究経過

- 5月 7日 第1回部会役員研修会  
研究課題・内容・方法の確認、部会当日について、日程確認
- 5月23日 第2回部会役員研修会  
研究協議会の協議方法（分科会構成・役割分担）の検討、当日までの仕事内容の確認
- 7月 1日 部会だより第1号発行
- 7月30日 第3回部会役員研修会  
研究協議会当日の協議内容・方法の確認
- 8月 1日 部会だより第2号発行
- 9月 3日 石教研課題部会研究協議会  
第4回部会役員研修会  
部会だより第3号発行
- 10月10日 第5回部会役員研修会  
研究の成果と課題の洗い出し、『石狩の教育』原稿読み合わせ
- 1月24日 第6回部会役員研修会  
今年度の研究のまとめ、次年度の研究について

#### (2) 部会役員研修会での研究成果

- ① 今年度も部会員の関心が高い、新学習指導要領に関する理論研修会を行うこととした。
- ② 理論研修会を行うため、今年度も南北開催ではなく、1ヶ所での開催とした。
- ③ 3回の部会だよりとHPで、部会員への研究内容や日程などの周知を行うことができた。
- ④ 講演会と分科会の両方を実施する形を継続していくこととした。分科会をより有意義なものにするために、今年度並みの時間を確保することを確認した。

### 2. 課題部会研究協議会での交流

#### (1) 課題部会研究協議会での交流内容

##### ① 実践・レポート交流の様子

各学校が研究内容に沿ったレポートを持ち寄り、交流を行った。その後、討議の柱を軸に研究協議を行った。各グループのレポートで取り上げられた項目の一部を紹介する。

Aグループ（小） 司会：小野寺 英輝（千歳小） 記録：高橋 光徳（恵み野旭小）  
・学習規律 ・支援員の活用法 ・演習時間の確保 ・各種調査の分析、活用法  
・R- PDCA サイクルによる改善 ・小中連携の重要性

Bグループ（小） 司会：三田村 要（中央小） 記録：森 正彦（北栄小）  
・60分授業のもち方 ・外部資源の活用、外部機関との連携 ・小中連携  
・学校力向上に関わる実践 ・最低学力保障の実践 ・共通理解、職員の意識化

Cグループ（小） 司会：徳中 和将（千歳緑小） 記録：永井 星児（北広島西部小）  
・行事のもち方と時数の確保 ・学力向上と学力保障 ・小中一貫教育 ・小中連携  
・保護者の理解と協力 ・放課後学習のもち方 ・特別支援

Dグループ（小） 司会：内藤 裕一（江別第二小） 記録：阿部 恵子（信濃小）  
・60分授業のもち方 ・家庭訪問、個人懇談の取り組み方 ・小中連携、小中一貫教育  
の新しい取組への臨み方 ・負担のみを増やさない「カリキュラム・マネジメント」

Eグループ（小） 司会：立花 秀俊（日の出小） 記録：和泉 誠（島松小）  
・小中連携の取り組み方と成果 ・地域との連携と情報発信 ・60分授業のもち方、運動会練習での有効な活用法

Fグループ（中） 司会：吉川 広樹（大曲中） 記録：堀部 秀成（広葉中）  
・小中連携 ・不登校への対応 ・道徳科の評価 ・ICT活用 ・学校改善プランの見える化 ・PDCAサイクルのスピード感 ・コミュニティスクール

Gグループ（中） 司会：中出 真勇（恵庭中） 記録：秋本 康太（北斗中）  
・e-ラーニングの使用法 ・アクティブラーニング室の活用 ・土曜授業の実態  
・小中連携 ・週末課題の取組方法 ・学力向上 ・卒業後の進路

Hグループ（中） 司会：吉田 純永（樽川中） 記録：七宮 義通（恵明中）  
・教科部会の充実 ・生徒指導の全体把握 ・定期的な打合せのもち方 ・職員配置の工夫について

Iグループ（中） 司会：林山 信吾（拍陽中） 記録：小川 琢治（花川中）  
・小中連携、地区単位でのスタンダードの打ち出し ・地域との連携 ・教育推進の政策  
・キャリア教育 ・学力向上と放課後学習会について

Jグループ（小） 司会：鹿島 幸司（末広小） 記録：太田 千穂（中央小）  
・特徴的な取り組みについて ・アイヌ文化学習 ・地域素材の活用 ・60分授業とカリキュラムの組み方 ・生活科から理科、社会科、総合的な学習の時間への接続

Kグループ（小） 司会：黒崎 寛人（当別小） 記録：佐々木 元宏（中央小）  
・特徴的な取組について ・人材活用について ・学校のお祭りについて  
・小中一貫教育 ・キャリア教育 ・総合的な学習の時間の計画 ・プログラミング教育

Lグループ（中） 司会：野澤 琢磨（江陽中） 記録：北條 裕（江陽中）  
・自主性を育む合唱の取組 ・地域交流会等の行事の減少 ・防災学習 ・キャリア教育  
・外部人材の活用 ・義務教育学校 ・観点に合った活動内容となる総合的な学習の時間

## ② 成果と課題

○グループを小学校、中学校で分けたことにより、小中連携、道徳科、プログラミング教育など校種ごとのタイムリーな話題について交流することができた。また、学力向上やPDCAサイクルを意識した授業改善など、各校の工夫を凝らした取組についても交流することができた。新学習指導要領への移行期間の具体的な取組についての情報を交換する良い機会となった。

△昨年度より、理論研修の時間を減らして協議時間を増やしたが、各校の状況報告にとどまり、協議できなかったグループもあった。各校のレポートの内容が豊富で多くの情報を交流できる利点があるが、視点を絞って協議するなどの改善も必要であると考えられる。

△前半の理論研修会、後半のレポート交流・協議ともに有意義な取組である。限られた時間の中で有効な交流・協議ができるように、さらなる運営上の工夫が必要である。



## (2) 課題部会研究協議会での協議内容

レポート発表内容（各学校の取り組み内容）やグループ協議であがった話題について一部を紹介する。

### 討議の柱 1

学校教育の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現

### 【構造的・弾力的な教育課程の編成】

\*外国語活動・道徳を含む

- ・「カリキュラム・マネジメント」の実現のために、計画をどのように実践していくか。全体化の回り方や職員の意識化をどのように進めていくかに工夫が必要である。
- ・60分授業の回数については、その年度の授業日数によってカスタマイズすると良い。
- ・何も減らさずに60分授業を実現することは困難である。子どもも教師も負担が多いため「何をカットすべきか」をじっくりと論議すべきである。
- ・新しい取組に追われるようにして何かを進めている現状だが、学校、教師にもう少しゆとりがあり、どこか牧歌的な雰囲気が残るような職場でありたい。
- ・eラーニングを朝学習や授業で活用している。効果的な利用法と習慣化が今度の課題である。
- ・道徳の教科化にともない、評価の見取りが課題となっている。
- ・行事の時数を削減している現状にある。運動会の午前日程での開催も検討している。

### 【調査・データに基づいたPDCAサイクルによる改善】

\*学力向上策・指導方法の工夫改善を含む

- ・学校改善プランで、一人一人の取組や成果が見える分析を行うことで職員の意識が変わり、授業改善、学力向上に向けて同じ方向を向いて仕事ができるようになってきた。
- ・全国学力学習状況調査、NRT、CRTの結果、Q-Uを分析してR-PDCAサイクルとして回している。
- ・PDCAサイクルにスピード感をもつことが必要である。生徒指導のスピード感が学習指導で生かされていないと感ずることがある。
- ・教科部会を充実させ、複数学年に入れるようにしている。全体把握や生徒指導に配慮や工夫が必要だが、うまく取り組むと職員全員が全体を見ることができる。
- ・授業の型がしっかりできていることが学力の支えになっている。分析結果を全体に考えてもらう教務の取組がよい。
- ・学力向上に向けて、放課後学習や朝学習、給食の準備の時間などで担任外の教員が個に応じた指導を行っている。
- ・学力向上の取組として、各校では様々な対策を講じている。

〈例〉

- 学習規律の統一、授業の仕方や支援員の活用などの共通理解
- 演習時間の確保
- 発展問題プリントに取り組む、家庭学習の意欲喚起
- 最低学力問題と繰り返し指導
- 放課後学習会、朝学習会、長期休業中の学習支援の取組



○通年を通じた習熟度別少人数指導の算数科の取組

**【外部資源の活用、外部機関との連携】**

**\*地域連携・小中連携・コミュニティスクールほかを含む**

- ・外部の人材をもっと活用した方がよい。一度パイプを作っておけば、担当教員が変わっても続けることができる。
- ・小中でスタンダード（学習規律）を揃えたり、生徒指導の交流を行ったりしている。
- ・小学校の先生が中学校へ出向く機会があってもよい。
- ・中学校の定期テスト期間に合わせて、小学校でも学習強化期間を設ける方法もよい。
- ・小中間で外国語の定着度の共有を図る必要がある。
- ・小中連携の取組があまり認識されていなかったなので、今年度は保護者に積極的に周知している。中学校側から見ると、児童の状況を知ることができ、快く引き受けてもらえることが多い。小学校側は、事前の打ち合わせの大変さもさほど感じなく、中学校の先生が来ることで児童により緊張感と刺激があたえられて有効である。
- ・小中で乗り入れをする場合は、お互いの学校の参観ではなく、しっかりと授業を担当することが重要である。小中連携で軸になる教職員が抜けたときにどのように継続していくのかが課題である。
- ・顔が見えるコミュニティスクールとして、それぞれの部会に分かれて取り組んでいる。
- ・地域と協力していくため、きめ細やかな情報の発信を心がけている。

討議の柱2

自ら課題を発見し解決する資質や能力を育成する「総合的な学習の時間」のあり方

**【探究的な見方・考え方、主体的・対話的な学び】**

- ・体験ありきで探究的になっていないことがある。また、アイヌの学習は、伝統的となっていて課題を感じている先生があまりいない現状にある。
- ・生活科から、理科、社会科、総合的な学習の時間へスムーズにつなげる必要がある。生活科で、教室や校内の地図を作ることを通して、つながりを意識した実践を行った。
- ・総合的な学習の時間のカリキュラムの組み方は、ある程度の土台があり、そこに加除することで実態に合わせた学習にするとやりやすいのではないか。
- ・観点に合った活動内容を考えていく必要がある。教科横断的な内容の時数の確保に課題がある。

**【発達に応じた縦のつながりと各教科等との横のつながり**

**(特色ある教育の推進)】**

- ・厚田地区では、昨年度から小中で同じ校舎で生活している。次年度から義務教育学校として9年間を、4年、3年、2年で区切る。総合的な学習の時間で、一次産業、三次産業、職業体験など地域の特性に合わせた学習にも取り組んでいきたい。
- ・キャリアの一環として、地域にある物に学ぶ、地域に住んでいる人に学ぶ、先哲に学ぶといったソクラテスマーティングを行っている。
- ・プログラミング教育は、あまり進んではない現状にある。いろいろな教科で取り組んでいくべきものなので、どのように取り入れていくのが効果的かを検証していかななくてはならない。

### Ⅲ. 理論研修会

#### 1. 理論研修会の内容

北海道立教育研究所企画・研修部主査 竹見 純氏をお招きし、「新学習指導要領の円滑な実施に向けて」と題して理論研修会を行った。

- (1) Society 5.0の社会像から、これからの子どもたちにはどのような力が必要か、教育はどうあるべきか、教師の役割は何かについて問題提起をしていただいた。
- (2) 外国語教育については、小中連携を一層推進して、学年が上がるごとにコミュニケーションを図ることができるようにすること、教員自身の英語力の向上を図ることの大切さをお話しいただいた。道徳教育については、考え議論する道徳への転換を、プログラミング教育については、情報活用能力育成の必要性をお話しいただいた。
- (3) 新学習指導要領全面実施に向けて、教科・科目等の新設や目標・内容の見直しによる「何を学ぶか」や主体的・対話的で深い学びの視点から「どのように学ぶか」を通して、「何をできるようにするか」が大切であることをお話しいただいた。



#### 2. 理論研修会の成果

学習指導要領改訂に向けて、新しい時代に必要となる資質・能力の育成と学習評価の充実をしっかり意識すること、そのためのカリキュラム・マネジメントが大切だと認識する場となった。また、外国語教育、道徳教育、プログラミング教育の在り方等についてもお話しいただき、外国語教育では、移行期間にはその年によって外国語教育に関わる経験年数に差があることを教えていただいた。道徳教育では、考え議論する道徳のポイントと共に評価についてもお話しいただいた。プログラミング教育では、その目標とともに各教科の学びをより確実にすることの大切さを教えていただいた。新学習指導要領の本格実施に向け、より深く理解して取り組んでいかななくてはならないということを確認することができた。

### Ⅳ. 部会研究の成果と課題

#### 1. 成果

新しい時代に必要とされる資質・能力を育成する「社会に開かれた教育課程」に迫るため、前半は理論研修会を通して、新学習指導要領の円滑な実施に向けての理解を深めることができた。また、後半のレポート交流・協議では、教育課程の編成、小中連携、学力向上の取組、総合的学習の時間の特色ある取組など、各市町村、各校の実践を知ることができ、貴重な情報交換の場を提供することができたと考えられる。学校教育の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現や、自ら課題を発見し、解決する資質や能力を育成する総合的な学習の時間の在り方について、見聞を広げることができた。

#### 2. 課題

今年度も学習指導要領改訂に向け、外国語教育、道徳教育、プログラミング教育など、教科・科目等の新設や目標・内容の見直しによる大きな変化への対応に迫られている現状にある。そのため、【研究内容1】の「カリキュラム・マネジメント」に関する内容が多く、【研究内容2】の「総合的な学習の時間」の話題は少なめではあった。しかし、次年度以降も研究を継続してより充実した総合的な学習の時間の在り方を探る必要があると考える。また、新学習指導要領に対応した新しい取組への研究にも力を入れて推進していく必要があると考える。

(文責 戸根谷 哲史)